

女子大学の真の充実を

— 就任のあいさつにかえて —

石田 章

四月一日付をもって、このたび同志社女子大学長の任につくことになりました。まことに思いもかけなかったことで、浅学非才の私にはいささか荷の重すぎる感をぬぐいきれませんが、一月二十六日の女子大学教授会で選出されて以来、実に沢山の学内外の方々から、温い励ましのお言葉やお便りをいただき、それらに接するうちに、女子大学のために、そしてまた、愛する同志社のために私が少しでもお役に立つのであれば、微力ながらも全力を尽して任にあたらねばならぬ、と覚悟を決めた次第です。激励の言葉をお寄せくださった皆さまに、この場を借りて、あらためてお礼を申し上げます。

ご高承の如く、女子大学も昨年四月、田辺に新キャンパスを建設し、新たに短期大学部（英米語科・日本語日本文学科）を開設、また同時に学芸学部音楽学科を一年から四年まで一挙に移転させました。さらに現在来年四月から使用開始の予定で、第二期の建築工事を進めており、そのうち課外活動センター（恵愛館）は、この八月初旬にいち早く完工をみ、十月から本格的使用を開始します。他の講義・演習、管理・研究棟四棟も、現在きわめて順調に工事が進んでおり、今年末には

ほぼ完成をみる予定です。来年四月からは、英文学科一、二年次生の授業を田辺で始めることになり、一九九一年(昭和六十六年)度からは、英文学科はすべて田辺に移転を完了することになります。女子大学における短期大学の設置計画や田辺校地の利用計画は、遠く越智文雄学長の時代です。で立案され検討が行われておりますが、この大事業がこうした実現を見るためには、女子大学が長年にわたって蓄積してきた潜在的エネルギーの発揚が必要であり、とりわけ、そうした力の一つに結集させた岡野久二前学長の卓越した指導力と行動力があってはじめて可能になったと言えましょう。

女子大学は、現在大学院、四年制学部、および短期大学部をあわせるとほとんど四、〇〇〇名に近い数の学生を擁しています。専任教職員の数もすでに一六〇名に達しております。女子大学について語られる時、以前であればよく「小ぢんまりとした」とか「スモール・カレッジ的な」といった風な言葉が用いられてきました。しかし、右の数字にもみられるように、現在の女子大学は、最早小ぢんまりとしたスモール・カレッジとは言えなくなっています。学生数が四、〇〇〇名を越えるのもそう遠くはないでしょう。しかも、キャンパスは、今出川と田辺の二校地二拠点に分かれ、数の上ばかりでなく、空間的にも大きく拡大されてきました。大きくなる、ということは確かに力を増すことです。たくましくなることです。けれども、私たちは、このような拡大が、かりにも拡散の方向を辿ることの決してないよう、厳に自らをいましめ、意を尽さねばならないと思います。女子大学のこの十数年来の充実発展ぶりは、女子大学に連なるもの一人として、私は大いに誇りを覚えるものです。しかしながら、同時に、この充実発展を踏まえて、私たちは今一度、教育と研究の真の原点に改めて立ち戻るべき時であるように思われます。数の拡大から、私たちはより一層の質的充実へと向うべき時であるように思われます。

すぐれた環境と最新の施設がより良き教育研究をうながすことは言をまちません。今出川キャンパスは同志社の古い歴史と伝統をしのばせる風格に満ちています。また一方の田辺キャンパスは、

まさに同志社の新たな第二世紀を踏み出すにふさわしい清新の気にあふれています。私たちは、そのいずれのキャンパスにも愛着を覚え、心引かれます。しかし、教育研究とは、究極において、それは人の問題であると思います。すぐれた人格が、生新な魂とふれ合って、それを育みそだてていく。そこに、何時の時代にあっても変ることのない、人が人を造りあげる、教育研究の原点があると思います。女子大学の真の充実も、こうした教育研究の充実により強く裏打ちされたものでありたいと思います。

「吾人は一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」と語った校祖新島襄の教育理念は、きわめて遠大なものであったと私は思います。一国の良心ともいうべき人材とは、それ自身はむしろきわめて地道な存在であろうと思われれます。新島は、しかし、そうした「良心の全身に充滿した」人材が、同志社教育を通して、一人また一人と増え、やがて世に満ち満ちる日を遠く見つめていたのです。新島が同志社教育の完成を二百年の将来においた所以もここにあると思うのです。

わが国の私学の現実は、きわめて厳しいものがあります。同志社も、そして女子大学も決して例外ではありません。切り開いていかねばならない多くの困難な問題をかかえています。女子大学で持てる力と英知を結集してことに当るべき時です。学内外の、ご支援とご指導を心から願う次第です。

(同志社女子大学長)

皆精神活力あり真誠の自由を愛し

田 中 久 雄

この夏読んだものの中で一番は、社史資料室の河野仁昭氏の編まれた「創設期の同志社」——卒業生たちの回想録——でありました。私は中学校より同志社に学びましたので、創設期の同志社につきましても多くの先生方からいろいろとうかがい、自然にある種のイメージを抱くようになったわけがあります。新島先生の心のこもった熱情あふれるお祈りでもって同志社が開校されたこと、耶蘇者の学校だと言うことがわかるとまわりから随分妨害されたこと、開校の翌年「熊本バンド」と呼ばれる人達が熊本から大挙して来校し大変な騒ぎがもち上ったことと大いに活気が出たことなどがあります。

いま「創設期の同志社」を読んでみて興味深く思いますことは、名前をきいて知っているあの偉い先輩の方々が、自分の同志社での生活をふりかえり、数々のエピソードを交えながら、自分達の同志社での生活はひとつひとつ有意義だったと語っておられることであります。勿論その中には思い違いや多分に脚色されたものもあるとは思いますが、清滝の「ますや」で栗飯を一人で十二杯もたいらげたこと、稻荷山で兎狩りをしたところ狐がかかってこれを食べたこと、毎年の運動会の旗

奪いでは源平に分かれて下帯ひとつであらそい外人宣教師がびっくりしたことなど、丁度同志社の裏話をうかがうようでこれもまた興味がつきませんでした。

「勉強は同志社の特徴で開発主義である。各学科目総て英語でやるのであるが、全部下調べがあるのである。」「私が在校して居た頃の同志社は、学校としては夫れ程整頓して居なかった。……時間中、先生と議論をして居るのであるか、授業をしているのであるか判ら無い位であった。」「みんな相当な勉強家で、授業も先生が教えると言うよりも生徒が予め準備をしてきて先生に質問をして進めると言う具合だったようです。なかには先生の知らないことまで調べあげて質問をし窮地に陥れては面白がったり、今ではとても考えられないことですが、教場で先生と激論したあげく取っ組み合いをするまでに至ったようであります。何かにつけて不整頓といえれば不整頓でありましたが、「教師みんなには熱心があつた、精神があつた。」「教師との間にも生きた関係をもって居た。」など、その職責を機能的にはたすことだけで精一杯な私にとって、生徒との間で精神があり生きた関係を持つということがいま何よりも求められていると思うわけであります。

「新島先生は国家思想が強い人で、日本と言う事に就て重く感じて居た人である。国民を救う、日本国民の品位を高めると言う考えが余程あつた様に思う。」小新島たちは何をもってこれに応えようとしたのでしょうか。「一つは宗教を専門にして伝道を以て国を救はふと云ふ氣」、「他の一つは宗教許りではない、身を治めると同時に、大ニ政治文学の方面に傑い人を生ぜしむる必要があると云ふ」考えでありました。官製の国家論がうずまき、「日の丸」「君が代」が教育の場にもち込まれようとしている現在、「日本と云ふ事に就て重く感じる」とはどういうことなのか、「国民を救い、日本国民の品位を高める」ためにいま同志社は何が出来るのか、また何をしなければならぬのかをよく見極めなければならぬと思うのです。「伊藤博文公が或時同志社へ来校された事がある。其時伊藤公の威風堂々たる容姿に接して、脱帽は勿論頭を下げた学生が一人も無かつた。」こんな文章に出会いますとこれぞまことの同志社人と叫びたくもなりません。権威におもねず、自分

一己の処置にのみ心を勞することのない人物の開発を生徒と共に心掛けて行きたいと思えます。また目先のことばかりにとらわれず目をもっと大きく見開らき、幅広くものをとらえ、国の前途をも展望することの出来る大人物の将来を夢みたいと思うのです。

それは「同志社教育の目的は……皆精神活力あり真誠の自由を愛し以て邦家に尽す可き人物を養成する」(新島先生の遺言) ことにあるからなのです。

(同志社高等学校長)

就任の言葉

現在そして未来への祈り

谷川孝造

四月の校長職就任以来半年近くが過ぎました。浅緑の葉が濃緑になったのが瞬時の様でもありませんが、刻が止ったかの様に思える長い日もありました。この三月迄、学級担任やクラブ顧問とし

て、いわば教育現場の最前線にいた私ですから戸惑いや不安の連続であったのは当然かと思いません。近頃は職責の重さを痛感する毎日です。

中学校は八クラス毎の三学年、九六〇名定員の小さい学校です。幸い本年度入試にも、関東から沖繩迄の広い地域から三倍をこえる優秀な受験者があった事は、多くの先人の努力と共に総合学園の有難さを思います。しかし本校には現在とその未来について、私学として、また小規模の単独中学校として数多くの問題をかかえています。

同志社中学校で変ってほならないものはキリスト教主義に基づく良心の教育であり、それが知育・体育と共に大切な徳育の根幹をなすものである事は申す迄もありません。創立以来連綿として継承されてきた毎朝の礼拝はその一つの表われでありましょうし、一年生の新島伝学習は、新島先生の同志社設立の念願を理解し、神と人との尊厳を覚える大切なものでありましょう。しかし近年の受験産業の過熱と共に、入学早々、それ迄の受動的な束縛の生活からの解放のせいでしようか、自らの行方を見失ったかの如く戸惑う生徒がいます。私達は今迄以上に生徒の自主性の育成や徳性の涵養等、総合学園の中にある中学校の担うべき役割を強化しなければなりません。教師が生徒と寝食を共にする学校行事を大切にしているのはその為であり、更に研究と実践を進めたいと思います。また全学園的には、例えば一貫教育検討委員会の成果を具体的に肉付けする取り組みや、学園内交流を盛んにする等、同志社学園の教育の質的向上を強く願っております。

中学校は他に例をみない伝統の重みを持つ優れた環境にあります。多くの巨木に囲まれた建物。京都最古の、煉瓦造りの重要文化財彰栄館は教育活動に使われ、創建以来始業の合図に鳴り続けてきた塔屋の鐘は、今も生徒の手で綱がひかれています。いま一つの重文礼拝堂は本年より四十二ヶ月三億七千万円をかけての大改修工事が始まりました。従って毎朝の礼拝は大学の御好意により明德館で行なわれています。巨費の半額が国庫補助であっても、一中学校が負担に耐えられるものではありません。修復後は学園の礼拝堂として、以前にも増した全同志社の活用を諮と共に、改修工

事については、全同志社的対応を喪心より願っております。

同志社の歴史を身近に感じるキャンパスの雰囲気。世間で、荒れる中学校の時代と言われた頃にも、この優れた環境が生徒に良い影響を与えていた事は間違いないでしょう。しかし一方では老朽化した木造醇厚館の改築をはじめ、教育条件の緊急に改善すべき事柄も山積しています。更に校地の狭隘は難問です。京都御苑を借用しながらも、猶育ち盛りの中学生には校地が不足です。すばらしい伝統と環境の上に新しく活力ある教育を目指す時、何が変ってはいらないのか、何が変らなければならぬのか。毎朝の礼拝の時の私の祈りです。

小学生数が昭和六十年代を頂点に漸減期に入っている今、教育条件や財政その他、極めて多くの問題に直面している中学校です。

多くの難問を抱えながら教職員の協力を得て努力致す所存でありますので、全同志社教職員の皆様、そして同志社につらなる多くの方々の温い御理解と御協力を心から御願ひ致しまして御挨拶と致します。

(同志社中学校長)